

待降節第3主日 (ヨハネ 1:6-8,19-28)

私たちの教会に光について証しする人はいますか



この前、青年会のミニバザーに参加して愛のわざを実践しましょうと言ったら、去年の二倍の参加者だったそうです。宣伝しすぎましたかね？青年会もとても喜んでくれました。ありがとうございました。

今年は待降節が短いです。来週待降節第4主日ですが、その日のうちに主の降誕・夜半になります。12月3日から、待降節は3週間しかありませんでした。先週と今週、洗礼者ヨハネの証しを通して私たちはご降誕の準備をしています。洗礼者ヨハネは光について証しをします。

クリスマスが近づくと、決まって一種類の電話が繰り返しかかってくる。この時期に、うんざりするほどかかってくる電話です。この前の電話はこうでした。「24日のミサは何時ですか？」中田神父は意地悪なので、「24日朝は6時と9時です。」と答えます。

すると、「それってクリスマスのミサですか？」と聞き返してきます。「いいえ。待降節第4主日ミサです。」すると更に聞き返してきます。「クリスマスのミサはないのですか？」「ありますよ。夜半のミサは夜7時からです。」「ちなみに25日はミサはありますか？」「25日は朝6時と9時です。」この電話がずっと続きます。

この電話の対応で、私は罪に罪を重ねてしまいそうです。「そんなことでいちいち教会に電話かけてくるな」とか、「全部のミサに来ないくせに、ミサの時間を全部聞く必要があるのか」など、罪深いことを心の中で叫んでいます。

ここでようやく、洗礼者ヨハネの使命に思いが向かいます。「彼は光ではなく、光について証しをするために来た。」(1・8)中田神父は光ではなく、光について証しをするための存在です。「クリスマスのミサは何時ですか？」この電話はきっと、イエス・キリストに出会いたいから電話をかけているのでしょう。電話の対応は光について証しをすること、光である御子イエスの誕生に導くこと。そう自分に言い聞かせて、何度同じ事を聞かれようとも、誠実に対応しなければと思いました。

洗礼者ヨハネは、一度も自分に誉れを受けることなく、光であるイエスに誉れがもたらされるように働き続けました。彼はほかの箇所でもこうも言っています。「花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている。」(3・29)

イエス・キリストがおいでになるために、洗礼者ヨハネの働きはどうしても必要でした。彼の働きはのちにイエスから「ヨハネは、燃えて輝くともし火であった」(5・35)と称賛しています。世間的には「日の目を見ない働き」と映るかも知れません。それでも、救い主の準備のために、必要な人なのです。私たちの教会がイエス・キリストの輝きを映し出す鏡になるためにも、洗礼者ヨハネのような働きが必要です。

待降節第4主日(ルカ1:26-38)